ヲ格の具体名詞と動詞との連語の体系記述の精緻化

中山健一（茨城キリスト教大学文学部）

1. 目的

本発表は、奥田（1968-1972、以下、奥田論文）が示したヲ格の具体名詞と動詞の連語の体系を、大枠において継承しつつ、実例分析にもとづき一部修正、精緻化することを目的とする。具体的には、「おもちゃを(手で)いじる」等、【ヲ格の具体名詞(＝接触の対象)＋＜接触＞を表す動詞】からなる「接触」の構造の連語[1]と他の連語との移行関係について分析し、接触動詞を下位分類する。

連語の構造は、要素となる単語の結合価およびカテゴリカルな意味を基盤として、単語と単語のくみあわせの型として一般化されたものであり、有限の型が、独立していながらお互いに関係しあうという体系をなす。半世紀ほど前の論考だが、構造の体系のとらえ方、構造と要素の関係のとらえ方など、現代の言語研究においても重要な示唆を与えるものであり、志波ほか（2020）において奥田論文を発展的に継承していく必要性が指摘されている。

2. 先行研究

まず、奥田論文の連語の体系のうち、本発表でとりあげる部分について概観する。ヲ格名詞と動詞とのくみあわせのうち、ヲ格の具体名詞と動詞との連語（「物にたいするはたらきかけ」）の連語の体系を、奥田論文、および、早津(2022)をもとにまとめる。

もようがえ(対象変化) 【具体物ヲ　（具体物デ）　（～ク／ニ）　対象変化動詞】 変化の対象　手段　結果の状態 例：紙を鋏で半分に切る、布を赤く染める
とりつけ(付着) 【具体物ヲ　具体物ニ　付着動詞】 付着の対象　付着先 例：切手を封筒に貼る、壁に絵をかける
とりはずし(除去) 【具体物カラ　具体物ヲ　除去動詞】 【具体物ノ　具体物ヲ　除去動詞】 除去元　除去の対象 例：溶液から不純物をとりのぞく、壁の絵をはがす

[1] 奥田自身は「ふれあい」という和語を使用するが、志波ほか（2020）などを参考に、「接触」という漢語に置き換えた。以下、「付着(＝くっつき)」「除去(＝とりはずし)」「対象移動(＝うつしかえ)」「もようがえ（＝対象変化）も同様。

うつしかえ(対象移動) 【具体物ヲ　空間カラ　空間ニ/ヘ/マデ　対象移動動詞】 移動の対象　移動前の場所　移動後の場所 例：野菜を畑から駅まで運ぶ、机を 2 階に上げる
ふれあい(接触) 【(具体物デ)　具体物ヲ　接触動詞】 手段　接触の対象 例：両手で壺をなでる、鉛筆で机をたたく
結果的 【(具体物デ/カラ)　(空間ニ)　具体物ヲ　生産動詞】 原材料　出現場所　生産物 例：竹でざるを編む、駿府に城を築く

「接触」の構造について、奥田論文は、「ふれあいのむすびつき(※引用者注＝接触の構造)はほかのカテゴリーとの複雑な相互関係をもっているだろう。ふれあいのむすびつきをあらわす連語は、物にたいするはたらきかけの全過程のうちから、接触の段階あるいは側面をぬきだして、名づけているのだから、物にはたらきかけて、変化させることをあらわす、すべての連語と直接的に関係をもっていなければならないのである。なかでも、このむすびつきは、接触というおなじ現実の現象を表現するために、とりつけのむすびつきとはごくあたりまえに相互移行をおこなっている。」(p. 37)とし、「顔をさす」と「針を体にさす」、「喉をつく」と「壁に片手をつく」などの例を挙げる。さらに、動詞「とる」について、「腰から手ぬぐいをとる」と「小桶に湯をとる」の例を挙げて、「とりはずし(※引用者注＝除去)動詞の代表である**とる**が、とりつけのむすびつき(※引用者注＝付着の構造)をもつくる能力をもっているという事実は、とりはずしととりつけとの二つのカテゴリーがとなりあっていることをものがたっている」(pp32-33)と述べる。

また、奥田の連語論の枠組みにもとづいて、基本義として＜接触＞を表す動詞「はたく」の多義と連語の構造を調査した中山（2023）は、「はたく」が、「接触」の連語のほか、「付着」の連語、「除去」の連語の要素となることで、＜付着＞、＜除去＞の派生義を獲得していることを、実例分析調査をもとに明らかにしている。

3. 仮説

奥田論文で指摘された、いくつかの＜接触＞を表す動詞が「付着」の構造の要素にもなり「接触」の構造と「付着」の構造に相互移行関係がみられること、＜除去＞、＜接触＞を表す動詞「とる」[2]が「付着」の構造の要素になるということ、そして、中山（前掲）で指摘さ

[2] 「とる」は奥田論文で「ふれあい」の動詞とも「とりはずし」の動詞ともされている。

れた＜接触＞を表す動詞「はたく」が「付着」「除去」のいずれの構造の要素にもなることから、「接触」「付着」「除去」の構造どうしが密接にかかわりあっており相互に移行関係がみられると考えられる。奥田論文では接触的に指摘されていないが、「接触」の構造と「除去」の構造の間に相互移行関係がみられるのではないか。

この仮説を検証すべく、奥田論文で「接触」の構造の要素となるとされる動詞 36 の連語の構造を、コーパスを用いて調査する。

4. 調査方法

国立国語研究所のコーパス、BCCWJ を使用し実例分析をした。調査した動詞は、奥田論文が「ふれあい」の動詞としている 39 動詞から、基本義が＜接触＞とは言い難い、典型的な＜接触＞を表す動詞とは言い難い「かすめる」「はる」「ひく」を除外した 36 動詞である。BCCWJ の検索アプリケーション「中納言」を用いて、動詞をキーとして、前 4 語以内に格助詞「を」を伴うという条件で検索した。4 語以内に設定にしたのは、間に他の名詞、格助詞と副詞が入ることを想定してのことである。全ジャンル・全時代を検索対象として、500 例以下の場合は全用例を、500 例を超える場合はランダムに表示された 500 例を分析対象とした。分析対象から当該動詞でない例、当該の連語でない例（ヲ格名詞とキーの動詞との間に別の動詞が入っている例など）、ヲ格名詞が具体名詞でない例、慣用表現を除外した。

5. 調査結果の概要

結論を先どりして言えば、大略、次のように分類できる。

①純粋接触型　接触の連語の要素にしかならない

いじる、おさえる、かく（掻く）、かじる、かむ、こづく、さする、さわる、たたく、つかまえる、つつく（つっつく）、つねる、なぐる、なでる、ぶつ、ふむ、もむ／こする、なめる

（【自身の身体部位に　具体物を　動詞】の連語の要素にもなる）

うける、かかえる、だく、つかむ、にぎる、もつ

②接触・付着型　接触の連語以外に、付着の連語の要素になる

うつ、おす、さす、つく、ふれる

③接触・除去型　接触の連語以外に、除去の連語の要素になる

ぬぐう、はらう、ふく（拭く）

④接触・付着・除去型　接触の連語以外に、付着の連語、除去の連語の要素になる

とる、はたく

⑤接触・対象移動型　接触の連語以外に、対象移動の連語の要素になる

ける

6. 調査結果の詳細

以下、実例数と、収集できた実例をもとにした「代表例」を挙げ、詳しくみていく。

6-1 純粋接触型

動詞	実例数	(A) 分析対象 Nヲ=具体名詞	連語の構造		接触の割合 (B)/(A)	代表例
			接触(B)	その他		
いじる	422	317	317		100.0%	つま先で スリッパを いじる
おさえる	497	116	116		100.0%	指で 生地の端を おさえる
かく（掻く）	407	102	101	1 ※1	99.0%	手で 頭を かく
かじる	312	270	270		100.0%	前歯で パンを かじる
かむ	485	432	432		100.0%	前歯で 下唇を かむ
こづく	70	70	70		100.0%	棒で 頭を こづく
さする	283	283	283		100.0%	手で 背中を さする
さわる	485	483	482	1 ※2	99.8%	手で 器具を さわる
たたく	491	450	448	2 ※3	99.6%	棒で 竹を たたく
つかまえる	487	464	464		100.0%	手で イノシシを つかまえる
つつく・つっつく	419	411	411		100.0%	フォークで ロブスターを つつく
つねる	69	69	69		100.0%	左手で 頬を つねる
なぐる	480	480	480		100.0%	バットで 頭を なぐる
なでる	494	493	493		100.0%	手で 顔を なでる
ぶつ	79	53	53		100.0%	杖で 頭を ぶつ

ふむ	494	332	332		100.0%	足で レバーを ふむ
もむ	350	236	236		100.0%	手で カイロを もむ
こする	472	472	472		100.0%	たわしで 食器を こする デッキブラシで よごれを こする
なめる	477	388	388		100.0%	舌で ナイフを なめる 足からしたたる血を なめる

その他　※1:「氷を（ピックで）掻く」の例、臨時的な「対象変化」[3]。

※2 :「石を手にさわる」という、後述する【自身の身体部位に　具体物を　動詞】と類似した例だが、1 例のみ。例外的か。

※3:「馬肉をひき肉風にたたく」の例、臨時的な「対象変化」(1 例)。

「レバーを上にたたく」の例、臨時的な「対象移動」(1 例)。

これらの動詞は、ごくわずかな特殊な例を除いて、「接触」の構造の要素にしかならない。

最後に示した動詞 2 つも、「除去元」となるカラ格・ノ格の具体名詞が現れる実例が 1 つもないため、「除去」の構造の例があるとは言えない。ただし、「こする」の場合、ヲ格名詞が物の表面についている汚れなどの場合、「除去」とのつながりが見いだせなくもない（「カップのふちについた垢をこする」、「デッキブラシでよごれをこする」など 8 例)。同様に、「なめる」も、ヲ格名詞が物の表面についている液体の場合、除去とのつながりが見いだせる（「皿の上の蜂蜜をなめる」「シャツについたワインをなめる」、「肩にふき出た汗をなめる」など 15 例。）

また、次のような動詞は、【自身の身体部位に　具体物を　動詞】の連語の要素になる。これらは、「付着」の連語という見方が可能である一方で、奥田論文では、古い道具のニ格名詞とみなされている。表では、「付着？」で記す（以下、同様)。

動詞	実例数	(A) 分析対象 Nヲ=具体名詞	連語の構造			接触の割合 (B)/(A)	代表例
			接触(B)	付着？	その他		
うける	498	4	2	2		50.0%	接触：（手で）ボールを うける 付着？：頬に 秋風を うける

[3] 「それは、ダイヤアイスの嫌いな萱野が氷を掻くために常備している、アイスピックだった。」(あでやかな落日)

かかえる	496	153	121	32		79.1%	接触：両手で 花を かかえる/膝を かかえる 付着？：脇に ノートを かかえる
だく	242	102	89	13		87.3%	接触：両手で 幹を だく/子犬を だく 付着？：胸に 赤ん坊を だく/膝に 猫を だく
つかむ[4]	489	286	283	3		99.0%	接触：両手で 手すりを つかむ 付着？：手に コップを つかむ
にぎる	492	285	240	23	22 ※4	84.2%	接触：左手で ラケットを にぎる 付着？：手に バットを にぎる
もつ	473	45	39	6		86.7%	接触：片手で カメラを もつ 付着？：手に 鉛筆を もつ

その他　※4 「すし・おにぎりをにぎる」(4 例)。「結果的」。
「こぶしをにぎる」(17 例)。「結果的」。
「右手をグーににぎる」1 例、臨時的な「対象変化」。

6-2　接触・付着型

動詞	実例数	(A) 分析対象 ヲ=具体名詞	連語の構造				接触の割合 (B)/(A)	代表例
			接触(B)	付着	付着？	その他		
うつ	484	240	205	28	0	7　※5	85.4%	接触：指で キーを うつ/銃で からすを うつ キーボードを うつ/銃を うつ/球を うつ/敵を うつ 付着：地面に 杭を うつ/（腕に）注射を 打つ
おす	477	399	368	30	0	1　※7	92.2%	接触：指で ボタンを おす/自転車を おす/背中を おす 付着：紙に ハンコを おす
さす	488	118	24	86	0	8　※6	20.3%	接触：針で 皮膚を さす/刃物で 背中を さす 付着：串に 肉を さす/紙パックに ストローを さす
つく	387	107	32	67	0	8　※8	29.9%	接触：さおで 川底を つく/鐘を つく/胸を つく 付着：畳に 手を つく/床に 膝を つく/杖を つく

[4] なお、茶谷（2023）は、「つかむ」が「除去」の構造になることが指摘しているが、今回は分析実例数が少なく、例がみあたらなかった。

ふれる	360	320	63	243	5	9 ※9	19.6%	接触： 手で 船体を ふれる/じかに ドアノブを ふれる 実際に 楽器を ふれる 付着： グラスに グラスを ふれる 展示品に 手を ふれる/楽器の弦に 指を ふれる 付着？：【具体物を 自身の身体部位に 動詞】 金銀を 手に ふれる

その他　※5：「水（ほか、液体）を打つ」4 例。「そばをうつ」3 例（「結果的」）。

※6：「傘をさす」。

※7：「空気が物を前方におす」の例。臨時的な「対象移動」。

※8：「餅をつく」（「結果的」）。

※9：医学分野の例で【身体部位に　異常なものや状態を　動詞】というタイプ（「乳房・腹部に　腫瘤・しこりを　ふれる」）。

奥田論文でも指摘されている通り、上に挙げたような＜接触＞を表す動詞は、「付着」の連語の要素になる。ただし、表で示した通り、各連語の実例数の割合には大きな差がある。

「つく」の付着の連語について、今回の調査では「紙にハンコ・スタンプ・印鑑をおす」のような例に限られた。また【地面などの平面に身体部位（「「足」およびその延長の「杖」などを　つく」）の例は、付着先が明示されていなくても、「畳に手をつく」などの例と同様に、「付着の構造」とみなしたが、それが妥当な分析か、議論の余地がある。

「ふれる」について、「付着」の連語とみなしたものにも、いくつかのタイプがある。典型的な「付着」の連語の例（「グラスにグラスをふれる」）などがみられるものの、少数（3 例）である。用例数が圧倒的に多いのは【具体物に　自身の身体部位を　ふれる】であり、身体部位には「手を」「指を」「唇を」が見られた。特に【具体物に　手を　ふれる】が圧倒的多数を占め、これで 1 つのイディオムになっているとも言える。なお、ここには、文中にニ格の具体名詞が明示されていない例も含む。つまり、自身の身体部位を接触の対象とする「？ペンで自分の手をふれる」のような、「接触」の連語と解釈できる例はなかった。

また、「ふれる」は、前述の【自身の身体部位に　具体物を　動詞】のタイプと類似する例（「金銀を手にふれる」）も少数（5 例）みられた。

6-3　接触・除去型

動詞	実例数	(A) 分析対象 Nヲ=具体名詞	連語の構造			接触の割合 (B)/(A)	代表例
			接触(B)	除去	その他		
ぬぐう	490	451	198	66／250	3　※10	43.9%	接触：ハンカチで 口を ぬぐう 除去：顔から 水を ぬぐう/顔の 泥を ぬぐう ハンカチで 涙を ぬぐう
はらう	483	48	27	6／21		56.3%	接触：髪を はらう/剣で 槍を はらう 除去：シャッターの ほこりを はらう はたきで ほこりを はらう
ふく	427	427	271	34／155	1　※11	63.5%	接触：袖で 窓ガラスを ふく 除去：靴の 泥を ふく ナプキンで 口紅を ふく

その他　※10　「パンで皿をきれいにぬぐう」など、2 例、臨時的な「対象変化」。
「土を小指にぬぐう」、臨時的な「付着」。
※11　「黒板をきれいにふく」1 例、臨時的な「対象変化」。

「除去」の連語の実例数について、除去元が文中に明示されていない場合のうち、前後の文脈から除去元（カラ格／ノ格の具体名詞）が明らかであるため、当該文中では省略されているとみなせる実例も含めた。除去元の名詞が明示されている実例数と区別するため、実例数を「除去元の名詞明示のみの実例数／除去元の名詞明示なしも含む実例数」と表記する。

6-4　接触・付着・除去型

動詞	実例数	(A) 分析対象 Nヲ=具体名詞	連語の構造				接触の割合 (B)/(A)	代表例
			接触(B)	付着	付着？	除去		
とる	483	93	60	3／3	7	5／23	64.5%	接触　：受話器を・武器を・息子の手を　とる 付着　：沈殿物を 試験管に とる 付着？：【具体物を　自身の身体部位に　動詞】 メニューを 手に とる 除去：　王冠から 宝石を とる/車体の カバーを とる 歯石・汚れ・水気をとる
はたく	128	70	40	4／19	0	6／11	57.1%	接触：布巾で かおを はたく テーブルクロスを はたく 付着：顔に 乳液を はたく アジを 3 枚におろして小麦粉をはたいて油で揚げる 除去：手の 土を はたく 豆腐に小麦粉をまぶして余分な粉をはたく

前節と同様、「付着」「除去」の連語とした実例数を、付着先のニ格具体名詞、除去元のカラ格・ノ格具体名詞が明示されるかどうかで分けて示した。また、「とる」の例の中には、【自身の身体部位に　具体物を　動詞】と類似した例（「メニューを手にとる」など）の例が 7 例あった。

6-5　接触・対象移動型

最後に、本発表の主な主張から離れるが、＜接触＞を表す動詞が、「対象移動」の連語の要素となっている「ける」を挙げる。

動詞	実例数	(A) 分析対象 Nヲ=具体名詞	連語の構造		接触の割合 (B)/(A)	代表例
			接触(B)	対象移動		
ける	476	462	455	7	98.5%	接触　　：足で 地面を ける/馬の腹を ける 対象移動：ボールを 相手側フィールドに ける 銃を 後ろに ける

7. おわりに

本発表では、＜接触＞を表し「接触」の連語の要素となる動詞が、他の連語の要素となることを、実例分析をもとに明らかにした。時間の都合上、個々の動詞について詳述できないが、たとえば、「つかむ」と「つかまえる」、「つく」と「つつく・つっつく」、「ふれる」と「さわる」などの類義関係にある動詞において、連語の構造によって語彙的な意味の違いをみいだすことも可能だろう。

本発表において、先行研究が指摘していない主な主張は、例外的な、特殊な動詞ではなく、分析対象 36 の動詞のうち、5 つの＜接触＞を表す動詞が「除去」の構造の要素になり、連語の構造の体系における連語どうしの関係として、「接触」の構造から「除去」の構造への移行があることである。これは奥田論文が指摘する、複雑な相互関係を裏づけるものであり、「接触」の構造が「付着」の構造と「除去」の構造という対照的な構造に移行する言語事実の指摘は、連語の構造の体系記述をより整合性のとれたものにすると言える。

参考文献

奥田靖雄(1968-1972)「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」『教育国語』12、13、15、20、21、23、25、26、28. ［再録 言語学研究会編(1983)『日本語文法・連語論(資料編)』むぎ書房，pp. 21-149.］

志波彩子・早津恵美子・茶谷恭代(2020)「奥田靖雄構文理論の継承と発展」『日本語学会 2020 年度秋季大会 予稿集』pp. 249-262.

茶谷恭代(2023)「動詞「つかむ」の多義の記述－連語の構造的なタイプをてがかりに－」『東アジア国際言語研究』5，東アジア国際言語学会，pp. 155-175.

中山健一(2023)「日本語動詞の多義を支える構造－「はたく」を例に－」『茨城キリスト教大学紀要』57，pp. 1-18.

早津恵美子(2022)「「カテゴリカルな意味」をめぐって－奥田靖雄の連語論とカテゴリカルな意味」斎藤倫明・修徳健 編『語彙論と文法論をつなぐ』ひつじ書房，pp. 55-86.

コーパス

『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』国立国語研究所，中納言 2.7.2 データバージョン 2021.03.